

令和 3 年 6 月 25 日現在

機関番号：34411

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04824

研究課題名（和文）民俗芸能に内在するコミュニケーションの特質を援用した音楽授業実践モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of practical methods of music class lessons referring to the characteristics inherent in folk performing arts

研究代表者

石塚 真子（Ishizuka, Masako）

大阪体育大学・教育学部・教授

研究者番号：70348431

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、民俗芸能（秩父屋台囃子、神着木遣太鼓、水口曳山囃子、八丈島の太鼓、エイサー）の現場に赴き、「囃す/囃される」関係性の観点から芸能を分析し、それらを成立させているコミュニケーションの特質を明らかにした。また、人と芸能を基盤とする事例（学校現場での事例、民俗芸能の場で学び続けている人びとの事例など）から、生涯学習の視点に立った学習材と学習方法を考察した。これらの研究成果を基に、民俗芸能に内在する特質を活かした音楽教育の新たな授業モデルの構築を進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、民俗芸能を様々な方向から支える人びとへの内在的接近を試み、人と芸能との関わりについての調査を行い、生涯学習的観点から捉えた民俗芸能の授業実践モデルを構築した。このように長期間に渡って民俗芸能と音楽教育の2つのフィールドを往還するという研究方法は、従来の音楽教育研究とは一線を画する新しい試みであり、民俗音楽研究と音楽教育双方にとって有益なものと考えられる。また、民俗芸能の特質を採り入れた音楽教育実践への道筋をつけることができたことは、伝統音楽の教育の推進に寄与するとともに、従来の音楽教育の枠組みを超え、芸術・体育・社会等の隣接する諸領域とも接合した新たな教育実践方法の開拓にもつながる。

研究成果の概要（英文）：The study has focused the sites of the folk performing arts such as Chichibu Yatai Hayashi, Kamitsuki Kiyari Taiko, Minakuchi Hikiyama Hayashi, Hachijojima Taiko, and Eisa, and has analyzed the performing arts from the viewpoint of “whispering / being whispered” relationships. The findings in the field work have shown that those folk performing arts are established in communication, and have clarified the characteristics of the established communication.

The study has also examined learning materials and learning methods from the perspective of lifelong learning from case studies observed in people and performing arts that are engaged in school activities and in activities of people who continue to learn performing arts. Based on the findings, it has been shown that the study proceeds with construction of a new lesson model for music education that makes use of the inherent characteristics of the folk performing arts.

研究分野：音楽教育

キーワード：音楽教育 民俗芸能 コミュニケーション 太鼓

## 1. 研究開始当初の背景

民俗芸能の授業実践については、小・中学校音楽科において、民俗芸能のもつ音楽的要素が音楽教育の“素材”として教材化されることはあっても、民俗芸能のもつ本質的な魅力やそこに内在する特質に踏み込んだ授業実践は数少ない。また、民俗芸能の教材化に関する先行研究は散見されるものの、民俗芸能の太鼓を学習材とした音楽教育実践の立場からの研究は不十分であるといえる。

研究代表者は、これまで、日本各地の民俗芸能に着目し、主に太鼓を音楽科の学習材として実践的に活用するための研究を行ってきた。それと並行して、民俗芸能のフィールドへ頻りに赴き、観察や参加、実技研修、インタビューなどを通じて、それぞれの芸能の特質や現状、世代生成に向けての課題等について地道な現地調査研究を積み重ねてきた。その一連の過程において、民俗芸能と教育現場という2つのフィールドが、類似した指向性を持つという点において密接な関係にあることを見出した。それは、まず、伝統的な民俗芸能は、一定の「型」を持ちながらも、他方においてそれに縛られず、音楽を「伸び縮み」することのできる融通性を持っている。このことを担保しているのが祭りの担い手（山車の曳き手など）や演奏者同士の「信頼ある調和」を指向するコミュニケーションと考えられる。そうした特質は、民俗芸能が演じられる現場での囃す／囃される関係や、世代を超えた、教えない／まねる・ぬすむ（教え手／教わり手）の関係、地域コミュニティの内外でその民俗芸能を支える／支えられる関係とも通底している。つまり、民俗芸能を成立させている背景には、それに関わる多様な「人びと」の存在と、それらの「人びと」を民俗芸能へとひきつけ、つなぎ合わせようとする、コミュニケーションのいわば輻輳作用があると考えられるのである。

ところが、従来の音楽教育の現場では、民俗芸能などの音楽的要素だけが取り出されてパッケージされた「型」を持つ「素材」として扱われることが多く、教員主導の一斉授業のもとで、音楽そのものを生み出し、聴き、演じ、楽しむという人間の営みは背面に押しやられる傾向にあった。しかし、公共的な世代生成の場である学校の音楽教育において、子どもたちが「伸び縮み」する「生きた」民俗芸能を、授業空間における「信頼ある調和」のもとで体験することはきわめて重要である。それを成立させるためには、民俗芸能と同様のコミュニケーション作用を音楽教育の場において援用すればよいのではないかと考えた。

本研究は、民俗芸能の教材科において重要となる民俗芸能（音楽）の本質を見極める方法として、「囃す／囃される」関係性から分析することに着目して研究に着手した。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本各地に伝わる民俗芸能に内在する特質、とりわけ芸能音楽を成り立たせているコミュニケーションのあり方に着目し、この特質を音楽教育の実践に援用した授業モデルを構築し、音楽教育の新たな方向性を提示することを目的とした。

従来、音楽教育の領域において、民俗芸能は音楽のみをとり出して扱われる傾向にあった。しかし、民俗芸能そのものに不可欠な要素として、人びとを民俗芸能へとひきつけるコミュニケーションのいわば輻輳作用が見られる点に着目し、従来の研究とは異なる視角から音楽教育実践を考察する。そして、この特質を音楽教育の実践に援用し、両者をリンクさせることにより、子どもたちの主体性と多様性を前提とする多方向性コミュニケーションを基礎に置いた新たな授業モデルを構築することを目標として研究に臨んだ。

### 3. 研究の方法

#### (1) 民俗芸能のコミュニケーションの特質に関する調査

民俗芸能の特質に関する調査研究は、フィールドワークに基づく事例研究として行った。調査対象としたのは、秩父屋台囃子（埼玉県秩父市）、神着木遣太鼓（東京都三宅島）、水口曳山囃子（滋賀県水口町）、八丈島の太鼓（東京都八丈島）、エイサー（沖縄県沖縄市）の5事例である。これらの芸能をとり上げたのは、太鼓を中心とした囃子であり、太鼓の代表的な打法を学習できるからである。また、これらの芸能は、伝承されている地域外でも、プロの民族歌舞団やアマチュアの太鼓グループが舞台演目として取り上げるなど、多くの人々を魅了する芸能であり、児童・生徒にとっても親しみやすい学習材として提示することができると考えたからである。

調査は、各芸能が演じられる祭りの調査取材、保存会の練習、講習会等に参加することによって行った。「囃す/囃される」関係性を視点とした具体的な調査方法は、例えば、音と音を合わせるきっかけ、音と動きを合わせるきっかけなどの「合わせ方」を、心理的な要素とかけ声などの結果として目に見える要素の両面から分析した。その際、心理的な要素に関しては芸能の担い手等に聞き取り調査を行い、目に見える要素に関しては演奏を記録し、映像記録を通して分析を行った。

以上の現地調査と並行して、各芸能の関連文献の蒐集・補充・購読に努め、これらの資料の分析により、現地調査の手法・視点の適正化を図った。

#### (2) 人と芸能を基盤とする事例に関する調査

学校を中心とした民俗芸能の学びの場へのフィールドワークを行い、民俗芸能の場に外部から入った方への聞き取り調査、民俗芸能を教育実践に活かしている教員への聞き取り調査とその授業実践の参観を通して、芸能の学び方について調査した。の対象者については、フィールドワークにおいて5年以上継続して観察させていただいた3氏とし、聞き取り調査の内容をもとに芸能の学び方について分析・考察を行った。については、約30年「エイサー」などの民舞教育にとり組んでいる小学校の「民舞の発表会」とそれに向けた授業実践を参観し、教員に聞き取り調査を行った。

#### (3) 授業実践モデルの構築

(1)(2)の研究内容を、授業実践モデル構築へと接続することを試みた。特に、民俗芸能を取り組んでいる教員の授業実践、民俗芸能の場に外部から入り継続的に芸能を学び続けている方への取材を基に、生涯学習へと続く授業実践モデルの構築を行った。

授業実践モデルの実践・検証については、まず、大学生を対象とした実践を行い、そこで課題を改善し、小・中学校への授業実践モデル構築を行った。小・中学校で実践を行う予定であったが、新型コロナウイルスの関係で中学校での授業実践を行うことができなかったが、小学校での実践や実践予定であった中学校の音楽教員の助言等を基に授業モデルを構築した。

### 4. 研究成果

#### (1) 学習材としての民俗芸能の分析について

本研究に着手する以前から、民俗芸能を「囃す/囃される」関係性から分析し、音楽の学習材としてどのように昇華させていくかということについて研究を行ってきた。具体的には、「音と人（太鼓と屋台、山車の曳き手など）」、「音と音（太鼓と笛など）」、「人と人（芸能の担い手と観客など）」の3つの視点から分析し、祭囃子に内在する「合わせ方」を明らかに

することによって教材化を試みてきた。本研究では、さらに視野を広げ、民俗芸能に関わる多様な「人びと」の存在と、それらの「人びと」を民俗芸能へとひきつけ、つなぎ合わせようとするコミュニケーションの特質に着目し、生涯学習へと続く授業実践モデルを構築した。従来の民俗芸能（音楽）の調査等で行われてきた視点に加え、芸能に携わる人々がどのように芸能と関わっているのかということも含めて「囃す／囃される」関係性から分析することで、各芸能におけるコミュニケーションの特質を明らかにすることができた。芸能を「囃す／囃される」関係性から分析することは、民俗芸能の本質を見極める際の一方法として有効であることを示すことができた。

## (2) 芸能の学び方について

人と芸能を基盤とする事例について、民俗芸能の場に外部から入った方への聞き取り調査、民俗芸能を教育実践に活かしている教員への聞き取り調査とその授業実践の参観を通して、一過性のとり組みで終わるような芸能の学び方ではなく、長い時間をかけた持続可能性のある学びにつながるような学習材と学習方法のあり方、すなわち生涯学習の視点に立った民俗芸能の学びのあり方を検討することが目指すべく方向性であると導き出すことができた。

において、3氏に共通するのは、それぞれキーパーソンとなる「人」との出会いが、芸能に魅せられるきっかけとなったことである。しかしそれだけではなく、3氏とも芸能を様々な角度から捉えており、そのことが芸能の奥行きに気付くことにつながったと考えられる。芸能の魅力だけではなく、その人なりの角度から芸能を捉え学び続けていくプロセスの中で、自分なりの学び方を模索していることがわかった。

については、「民舞の発表会」における子どもたちの学び合い育ち合いも、持続可能性のある学びにつながっていること。また、担任教員、体育専科教員、そのほか卒業生等がサポートしながら、さらに、地元と関わりながら行われていた「エイサー」の実践は、学校が、地域コミュニティを形成する要素の一つであり、音楽教育も学校空間の枠組みを超えて、子どもたちを主体として位置づけながら、教員や保護者、地域の人びとなどを巻き込んだ多様なコミュニケーション作用を纏いながら展開される可能性を持っていることが明らかになった。

つまり、民俗芸能の授業実践モデルの構築において、民俗芸能の特質および教育実践という両側面から検討した結果、次の二つの観点の重要性を明らかにすることができた。民俗芸能を遠方にある抽象的な対象として捉えるのではなく、人や人びとのなかに具体的に内在するものとして捉えようとする点。そして、教室空間という閉じられた空間のなかの授業論に終始するのではなく、民俗芸能の現場と関わりながらその教材化を通じて子どもの未来、民俗芸能の未来を見据えた実践へとつなげていこうという点である。

## (3) 授業実践モデルについて

本研究で行なってきた5事例の芸能のフィールドワークの詳細（芸能の特質）人と芸能を基盤とする事例から導き出された持続可能性のある学びのあり方を踏まえて、授業実践モデルを構築した。まず、授業実践は、民俗芸能の音楽を固定的な「素材」として扱う教員主導の「一斉」授業ではなく、子どもたちが授業のなかで多様かつ可変的な役割を持ちうるワークショップ形式を前提とした。さらに、学習内容については、音楽教育という閉じられた領域だけではなく、芸能をとりまく「ひと・もの・こと」との相互影響的ななかかわり合いを把握して学習内容を設定した。なぜなら芸能を総合的に見つめることから、子ども自身が自分なりの角度からも芸能を捉えることができると考えられるからである。また、授業実践の中で、子どもが芸能を自分に引き

つけて考えられるよう、芸能をとりまく「ひと・もの・こと」と結びつけて提示し、芸能の奥行きを見極められることにつながるような働きかけを行うことを目指して実践を行った。新型コロナウイルスの影響で小学校のみでの実践となってしまったが、例えば、水口曳山囃子など、これまででは音楽的な魅力を強調した学習内容・方法で行なってきたが、芸能を総合的に見つめ、芸能の奥行きを見極められることにつながるよう、囃子の本質的な部分を取り上げて実践を行った。

本研究でのフィールドワークを通して芸能の本質を見極め、それを大学の授業実践に適用し、実践と検証を繰り返し、小・中学校で取り組むことができる学習材と学習方法を開発することができた。

そして、本研究で行った研究成果を、教材テキスト「人に根ざした祭りの場から 民俗芸能の授業を紡ぐ」として授業づくりのポイントを、実践的な音楽教育研究の立場から解説することができた。

しかしながら、持続可能性のある学びにつなげるには、単発的な実践ではなく、例えば、学年をまたいで系統的に学習するカリキュラムの構築等が必要である。本研究の延長線上にカリキュラムの構築を位置付け、今後の課題としたい。

なお、この研究で得られた知見の一部は、論文、学会等で発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石塚真子	4. 巻 45
2. 論文標題 生涯学習の視点に立った民俗芸能の教材化について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 民俗音楽研究	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石塚真子	4. 巻 13
2. 論文標題 「今別荒馬」の授業実践試論 -民俗芸能に内在するコミュニケーションの特質に着目して-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音楽学習研究	6. 最初と最後の頁 99-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石塚真子
2. 発表標題 沖縄の伝統芸能の教材化について
3. 学会等名 日本教材学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石塚真子
2. 発表標題 生涯学習の視点に立った民俗芸能の教材化について
3. 学会等名 日本教材学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石塚真子
2. 発表標題 民俗芸能に内在するコミュニケーションの特質に着目した音楽授業実践について - 「今別荒馬」の音楽授業への援用可能性を中心に -
3. 学会等名 音楽学習学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関